

論壇



花田 達朗

沖縄と東京、その隔たりは大きい。その隔たりは単に千五百五十キロという距離だけではない。日本国地図では沖縄は端っこにあり、東京は真ん中にある。しかし、それは単に地理的な位置関係だけではない。東京は立法・司法・行政の中枢の所在地であり、何よりも象徴天皇の在り所である。さらに東京はマ

スメディアの生産中枢でもある。沖縄と東京、その関係は地理的にも権力構造的にも「周縁と中心」の関係として現れてくる。その関係が戦争の記憶の風景にも表されてきているのではないだろうか。戦争の記憶にとってそれは大きな問題ではない

だろうか。

戦争は主権国家同士での軍事的衝突である。「戦争の世紀」といわれた二十世紀、国民国家同士の総力戦で実際に戦ったのはあるいは戦わされたのは戦場の兵士ばかりでなく、「銃後」の国民であった。その兵士も「国民皆兵」により職業軍人ばかりでなく国民で構成された。国民

戦争の記憶 公共化を

抑圧への抵抗 報道に期待

は皆、戦争の加害者にも被害者にもなり、つまり当事者になった。

当事者には出来事と経験の記憶が残った。それは「人々の記憶」であり、一人一人の記憶である。しかし、それらのたくさんの記憶からなる風景は「中心」によって再編成されようと

する。

戦争の記憶の風景において東京が中心であってはならない。そうなることを防がなければならない。東京は戦争の記憶を過去のものにしてしまう。終わったこととして管理しようとする。沖縄は戦争の記憶を現在のものとしてしようとする。そして戦争の記憶を戦争の現在とつな

げ、今ある戦争と結び付けて考えようとする。

戦争の記憶は人々の中に宿る。そのたくさんの記憶をパブリックにし、公共化し、現在化しなければならない。そうすることで戦争の記憶の風景は「中心」による管理から逃れて、「公正」な、フェア

な姿を現すことができるから

だ。
そこで私はジャーナリズムに期待する。人々の記憶を訪ね歩いて、掘り起こし、それを多くの人々に伝え、記憶の風景を捉え直す仕事をしてほしい。それは記憶の抑圧に抵抗することであり、記憶の自由のための闘いなのだ。そのような仕事を担う若いジャーナリストを大学の門から送り出したいと考えている。

沖縄大学土曜教養講座 special「沖縄戦は終わらない Part II」8月10日(日)午後1時半から3号館101教室にて。予約不要、入場無料、問い合わせ〓沖縄大学地域研究所、電話098(832)5599。
(早稲田大学ジャーナリズム教育研究所長)